ISSN 0286-1674

英文學論叢

第 6 2 号

下村　伸子教授
高橋　勝忠教授　退任記念号

目　　次

論 文

「旋律の稲妻」
— エミリ・ディキンスンの詩と芸術家たち —
…… 下 村 伸 子（1）

Between Allegory and History:
Reading William Faulkner's *A Fable*
…… **Satoshi KANAZAWA** (28)

Fanny Marlowの物語
— もうひとつの "Tom and Viv" —
…… 佐 伯 惠 子（38）

『わたしを離さないで』における「凡庸な悪」
…… 松 宮 園 子（66）

"O, never shall sun that morrow see!":
the sun vs. coal morality play in *Macbeth*
…… **Marianne Kimura** (85)

Lexical non-correspondence in Japanese
and English: Adjectives
…… **John Campbell-Larsen** (102)

京都女子大学英文学会

2 0 1 8

下村　伸子教授　略歴及び著作目録

1954年　兵庫県生まれ

学歴

1972年3月　大阪府立北野高等学校卒業
1972年4月　京都女子大学文学部英文学科入学
1976年3月　京都女子大学文学部英文学科卒業
1976年4月　京都女子大学大学院文学研究科英文学専攻修士課程入学
1979年3月　京都女子大学大学院文学研究科英文学専攻修士課程修了
1979年4月　京都女子大学大学院文学研究科研修者（至1980年3月）

学位

1979年3月　文学修士

職歴

1979年4月　京都女子大学非常勤講師（至1989年3月）
1981年4月　立命館大学非常勤講師（至1989年3月）
1985年4月　同志社大学非常勤講師（至1994年3月）
1989年4月　京都女子大学文学部講師兼京都女子大学短期大学部講師
1990年4月　京都大学総合人間学部非常勤講師（至2006年3月）
1999年4月　京都女子大学文学部助教授兼京都女子大学短期大学部助教授
2006年4月　京都女子大学在外研究員（Pomona College<2006年4月～6月＞及び State University of New York at Buffalo <7月～2007年3月＞客員研究員）
2007年4月　京都女子大学文学部准教授兼京都女子大学短期大学部准教授（至2010年3月）
2009年4月　京都女子大学大学院文学研究科英文学専攻博士前期課程授業担当教員
2010年4月　京都女子大学文学部教授（2019年3月退職予定）
2013年4月　京都女子大学大学院文学研究科英文学専攻博士前期課程指導教員
2017年4月　京都女子大学大学院文学研究科英文学専攻博士後期課程授業担当教員

研　究　業　績

著書

1.『英米文学との出会い』共著　執筆担当「第二章　エミリ・ディキンスンをめぐって」

昭和堂　1983年9月。

2. 『日本エミリィ・ディキンスン協会編没後百年記念英語論文集』共著　執筆担当“The Wind After a Hundred Years”アポロン社、1988年5月。
3. 『ことば・意味・かたち—英米文学-批評と読解—』共著　執筆担当　「エミリ・ディキンスンの<結婚を語る詩>」愛育社　1993年4月。
4. 『テクストの地平』共著　執筆担当「「深淵のドーム」—エミリィ・ディキンスンの空間詩学」英宝社　2003年12月。
5. 『エミリ・ディキンスンの詩の世界』共著　執筆担当「エミリィ・ディキンスンの「寂しい風景」」国文社　2011年3月。
6. 『私の好きなエミリ・ディキンスンの詩』共著　執筆担当「七〇〇「私の手紙の読み方はこんな風です」」金星堂2016年6月。

学術論文

1. 「エミリー・ディキンスンの海」『文学と評論』　第9号　1980年12月。
2. 「Emily Dickinsonの詩の世界の一考察」*Essays &Studies* No.25（京都女子大学英文学会）1980年12月。
3. 「「エメラルドの亡霊」をめぐって—エミリ・ディキンスンにおけるある獲得」『文学と評論』第10号　1981年12月。
4. 「エミリ・ディキンスンの<美>」『文学と評論』第2集・第3号　1986年9月。
5. 「エミリ・ディキンスンの詩における差異と言葉」『英文学論叢』第37号（京都女子大学英文学会）1993年12月。
6. 「エミリ・ディキンスンの「私たち」の幻想」『英文学論叢』第38号（京都女子大学英文学会）1994年12月。
7. 「エミリィ・ディキンスンの危機の詩をめぐって」*Wisteria* 第4号（京都女子大学大学院英文学会）1998年3月。
8. 「エミリィ．ディキンスンの「肉体のない恋人たち」」『英文学論叢』第４２号（京都女子大学英文学会）1998年12月。
9. 「十九世紀アメリカ女性詩人たちの恋愛詩—サラ・ホイットマン、オズグッド、アリス＆フィービー・ケアリー」『英文学論叢』第44号（京都女子大学英文学会）2000年12月。
10. 「エミリィ・ディキンスンの詩的モノローグ—恋人／読者への告白—」『英文学論叢』第46号（京都女子大学英文学会）　2002年12月。
11. 「変容する空間—エミリィ・ディキンスンとマリアン・ムーア—」『英文学論叢』第

47号（京都女子大学英文学会）2003年12月。

12.「エミリィ・ディキンスンの初期の創作における実験」『英文学論叢』第50号（京都女子大学英文学会）2006年12月。

13.「「散文より美しい家」と「想像の庭」—アメリカ詩人エミリィ・ディキンスンとマリアン・ムーア—」『英文学論叢』第52号（京都女子大学英文学会）2008年12月。

14.「堅固な町の詩人—エミリィ・ディキンスンの海の詩における試み」『英語英米文学論輯—京都女子大学大学院文学研究科研究紀要』第9号　2010年3月。

15.「エミリ・ディキンスンの「断念」の詩—「より大きな機能」を垣間見て」*Essays & Studies*　第61号（京都女子大学英文学会）2016年3月。

16.「エミリ・ディキンスンと読者」『現代詩手帖』2017年8月号　思潮社　2017年8月。

17.「「旋律の稲妻」—エミリ・ディキンスンの詩と芸術家たち」『英文学論叢』第62号（京都女子大学英文学会）2018年12月。

学会発表・シンポジウム

1.「十九世紀アメリカ女性詩人たちの恋愛詩」日本エミリィ・ディキンスン学会第16回大会シンポジウム「ディキンスンと同時代のアメリカ女性詩人たち」（於駒澤大学）2000年6月。

2.「エミリィ・ディキンスンの詩的モノローグ—恋人／読者への告白—」日本エミリィ・ディキンスン学会第18回大会（於慶應義塾大学日吉キャンパス）2002年6月。

3.「変容する空間—エミリィ・ディキンスンとマリアン・ムーア—」京都女子大学英文学会2003年度大会（於京都女子大学）2003年11月。

4.「"Dome of Abyss"—エミリィ・ディキンスンの空間詩学—」日本エミリィ・ディキンスン学会第20回大会シンポジウム「今考えるディキンスンの魅力」（於神戸女学院大学）2004年6月。

5.「エミリィ・ディキンスンの「寂しい風景」を考える」日本エミリィ・ディキンスン学会第25回大会シンポジウム「ディキンスンと私たちが共有できること」（於早稲田大学）2010年6月。

6. "The Significance of Tone—Looking Back on Past Translations in Japan."（Emily Dickinson International Societyと中国復旦大学文学翻訳センター共催による第1回国際シンポジウム、於復旦大学）、朝比奈緑（慶應義塾大学）と共同発表2014年11月。

その他

（作成した教科書）

1. 『*The World of Emily Dickinson*—エミリ・ディキンスン—詩と手紙』山川瑞明、武田雅子と共編（弓書房）1983年4月。
2. 『The Little Bookroom—本たちの小部屋』」佐治多嘉子、林桂子と共編（南雲堂）1985年1月。
3. 『*Amethyst Remembrance: Emily Dickinson's Poems*「紫水晶の思い出」—ディキンスン詩集』山川瑞明、武田雅子と共編（弓書房）1990年4月。
4. 『*Romantic Women Poets*—ロマン派英米女性詩人選集』武田雅子、畠山智美と共編（英宝社）2000年1月。

（公開講座）

1. 「エミリ・ディキンスンの詩—アイデンティティを求めて」（京都女子大学英文学科秋季公開講座）1989年10月。
2. 「エミリィ・ディキンスンの危機の詩をめぐって」（京都女子大学英文学科秋季公開講座）1998年10月。
3. 「「散文より美しい家」と「想像の庭」—アメリカ詩人エミリィ・ディキンスンとマリアン・ムーア—」（京都女子大学英文学科秋季公開講座）2008年。
4. 「「旋律の稲妻」—エミリ・ディキンスンの詩と芸術家たち」（京都女子大学英文学科公開講座）2018年10月。

所属学会

日本アメリカ文学会

日本英文学会

日本エミリィ・ディキンスン学会

日本T.S. エリオット協会

Emily Dickinson International Society

高橋　勝忠教授　略歴及び教育研究業績

昭和29年（1954年）大阪府生まれ

学歴

昭和51年3月　立命館大学文学部文学科英米文学専攻卒業（文学士）
昭和51年4月　甲南大学大学院人文科学研究科英文学専攻修士課程入学
昭和54年3月　甲南大学大学院人文科学研究科英文学専攻修士課程修了（文学修士）
昭和54年4月　甲南大学大学院人文科学研究科英文学専攻博士課程入学
昭和55年9月　甲南大学大学院人文科学研究科英文学専攻博士課程退学

職歴

昭和52年4月　大阪市立泉尾工業高等学校非常勤講師（昭和53年3月まで）
昭和55年10月　福岡大学人文学部英語学科助手（昭和56年3月まで）
昭和56年4月　西南学院大学非常勤講師（平成3年3月まで）
昭和56年10月　福岡大学人文学部英語学科講師（昭和60年3月まで）
昭和57年4月　九州芸術工科大学（現九州大学）非常勤講師（昭和63年3月まで）
昭和60年4月　福岡大学人文学部英語学科助教授（平成3年3月まで）
平成2年4月　中村学園大学非常勤講師（平成3年3月まで）
平成3年4月　京都女子大学短期大学部助教授（平成10年3月まで）
平成4年4月　龍谷大学非常勤講師（平成9年3月まで）
平成4年4月　甲南大学非常勤講師（平成15年3月まで）
平成10年4月　京都女子大学短期大学部教授（平成12年3月まで）
平成12年4月　京都女子大学文学部英文学科教授
平成13年4月　平安女学院大学非常勤講師（平成15年3月まで）
平成15年4月　京都女子大学在外研究員（University of Essex）（平成16年3月まで）
平成16年4月　甲南大学非常勤講師（平成20年3月まで）
平成16年10月　平安女学院大学非常勤講師（平成17年3月まで）
平成20年4月　京都女子大学大学院文学研究科英文学専攻博士前期課程指導補助教授
　　京都女子大学大学院文学研究科英文学専攻博士後期課程授業担当教授
平成21年4月　京都女子大学大学院文学研究科英文学専攻博士前期課程指導教授
　　京都女子大学大学院文学研究科英文学専攻博士後期課程指導補助教授
平成23年4月　京都女子大学大学院文学研究科英文学専攻博士前期課程指導教授
　　京都女子大学大学院文学研究科英文学専攻博士後期課程指導教授

平成28年4月　龍谷大学非常勤講師

学会及び社会における活動

昭和54年4月　日本英文学会会員（関西支部編集委員、平成26-28年）
昭和54年8月　ICU夏季言語学研究会会員（昭和61年8月まで）
昭和55年10月　日本英文学会九州支部会員（平成3年3月まで）
昭和56年4月　福岡言語学研究会（現福岡言語学会）会員（平成3年3月まで）
昭和58年4月　日本英語学会会員
昭和60年4月　甲南英文学会会員（編集委員、平成9-10年・平成15-20年、会計監査、平成18-20年、副会長、平成22-24年。会長、平成25-27年）
昭和62年8月　東京言語学研究会会員（平成5年8月まで）
平成3年4月　関西英語学研究会会員（平成15年3月まで）
平成13年11月　英語語法文法学会会員（平成27年3月まで）
平成15年6月　イギリス言語学会（LAGB）会員（平成30年9月まで）
平成17年5月　関西レキシコン・プロジェクト（KLP）会員
平成21年9月　日本認知言語学会会員
平成21年10月　日本語文法学会会員
平成26年4月　全国英語教育学会会員
昭和56年7月　文部科学省認定実用英語検定試験面接委員、準1級～3級（平成15年3月まで）

研　究　業　績

著書

1. 『言語学からの眺望』（共著）　平成5年8月　九州大学出版会
2. 『ことばの音と形』（共著）　平成6年12月　こびあん書房
3. 『英語学用語辞典』（共著）　平成11年1月　三省堂
4. 『英語学セミナー　思考鍛練のための言葉学』（共著）　平成13年2月　松柏社
5. 『言語学からの眺望2003』（共著）　平成15年11月　九州大学出版会
6. 『派生形態論』（単著）　平成21年3月　英宝社
7. 『英語学基礎講義』（単著）　平成23年3月　現代図書
8. 『名詞の意味と構文』（共著）　平成23年11月　大修館書店
9. 『英語学基礎講義 第2版』（単著）　平成25年5月　現代図書
10. 『言語学からの眺望2013』（共著）　平成25年12月　九州大学出版会

11. 『現代の形態論と音声学・音韻論の視点と論点』（共著）　平成27年11月　開拓社
12. 『朝倉日英対照言語学シリーズ第4巻』（共著）　平成28年6月　朝倉書店
13. 『英語学を学ぼう　英語学の知見を英語学習に活かす』＜言語・文化選書69＞（単著）　平成29年10月　開拓社
14. 『ことばを編む』（共著）　平成30年2月　開拓社

学術論文

1. 「AUXの分析とその問題点」（単著）　昭和54年12月　*Perspective* 6
2. 「目的語削除とwh句移動」（単著）　昭和56年3月　『福岡大学人文論叢』第13巻第4号
3. 「英語における時制縮約とNot縮約の一考察」（単著）　昭和56年9月『福岡大学人文論叢』第13巻　第2号
4. 「動詞句削除における*V+ing* ϕの非文法性について」（単著）　昭和57年3月『福岡大学人文論叢』第13巻　第4号
5. 「動詞のTo補文とIng補文の共起関係：時間の軸による前提と含意の分析より」（単著）　昭和57年12月『福岡大学人文論叢』第14巻　第3号
6. "Problems on GSGP"（単著）　昭和58年6月『福岡大学人文論叢』第15巻　第1号
7. "Comments on "Cliticization vs. Inflection: English *n't*" by Zwicky and Pullum (1983)"（単著）　昭和59年3月『福岡大学人文論叢』第15巻　第4号
8. 「AUX（*have, has*）に関するreduced formとcontracted formの統語的な違い」（単著）　昭和59年11月『福岡大学人文論叢』第16巻　第2号
9. "Why does Number Neutralization occur?"（単著）　昭和60年1月　*Descriptive and Applied Linguistics* 18
10. 「英文法指導における「何故」の解明－その1　不定詞目的語と動名詞目的語」（単著）　昭和60年3月『福岡大学総合研究所報』第81号
11. 「最近の助動詞縮約に関する現状と批判－E.Kaisse（1983）の分析について－」（単著）　昭和60年12月『福岡大学人文論叢』第17巻　第3号
12. 「英文法指導における「何故」の解明－その2　進行形と命令形」（単著）　昭和61年1月『福岡大学総合研究所報』第87号
13. 「助動詞縮約の統語分析とそれらの諸問題」（単著）　昭和61年3月『甲南英文学会』1号
14. 「助動詞縮約の生起要因」（単著）　昭和61年6月『英語青年（研究社）』第132巻　第3号

15. "The Relation between Number Agreement and Auxiliary Reduction"（単著） 昭和62年2月 *Descriptive and Applied Linguistics* 20
16. 「否定接辞に関する考察－un接辞のクラスについて－」（単著） 昭和62年12月『福岡大学人文論叢』第19巻 第3号
17. 「英文指導における「何故」の解明－その3 語形成」（単著） 昭和63年2月『福岡大学総合研究所報』第103号
18. 「-en接辞の表層構造制約」（単著） 昭和63年12月『福岡大学人文論叢』第20巻 第3号
19. 「接辞のPP補助部の継承」（単著） 平成元年年5月『英語青年（研究社）』第135巻第2号
20. 「英語の阻止現象をめぐって」（単著） 平成元年11月『福岡大学人文論叢』第21巻第3号
21. 「語形成における名詞範疇条件」（単著） 平成4年1月『京都女子大学英文学論叢』第35号
22. "Adjective Category Condition in Word Formation"（単著） 平成4年3 *Proceedings of the 5th Summer Conference1991, Tokyo Linguistics Forum*（*TLF* 5）
23. 「-ly派生語の成立条件について」（単著） 平成7年12月『京都女子大学英文学論叢』第39号
24. 「-orの派生について」（単著） 平成9年12月『京都女子大学英文学論叢』第41号
25. 「-isticの派生について」（単著） 平成13年12月『京都女子大学英文学論叢』第45号
26. 「-th接尾辞と「-み」接尾辞の派生制約」（単著） 平成16年12月『京都女子大学英文学論叢』第48号
27. 「「的」論考」（単著） 平成17年12月 『京都女子大学英文学論叢』 第49号
28. 「派生語形成における接辞制約の問題」（単著） 平成19年12月『京都女子大学英文学論叢』 第51号
29. 「語彙のメカニズム」（単著） 平成22年3月 *ESSAYS & STUDIES* N0.55
30. 「目的語の認知と行為連鎖の二方向性」（単著） 平成22年3月『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要 英語英米文学論輯』 第9号
31. 「動詞連用形の名詞化とサ変動詞「する」の関係」（単著） 平成23年3月『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要 英語英米文学論輯』 第10号
32. 「分かる英文法から使える英文法－文構造（単文・重文・複文）－」（単著） 平成25年3月 *ESSAYS & STUDIES* N0.58

33. 「「～中」の意味と連濁の関係について」（単著）　平成26年『日本認知言語学会論文集』第14巻, 396-408.
34. 「「-っぽい」の考察：「-っぽさ」と-ishnessの関係について」（単著）　平成27年3月『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要　英語英米文学論輯』第14号
35. 「英語学を学ぼう（英語学習に役立つ意味概念と構造概念）」（単著）　平成31年3月『KELESジャーナル』vol.4　関西英語教育学会

口頭発表

1. "Some Analyses of Aux and Their Problems"（単独）　昭和54年8月　ICU夏季言語学研究会　第18回大会（ICU）
2. "Deletable Object and wh-Movement"（単独）　昭和56年1月　福岡言語学研究会
3. "Tense Contraction and Not-Contraction in English"（単独）　昭和56年6月　福岡言語学研究会
4. "Concerning the Ungrammaticality of V+ing ϕ in VP-Deletion"（単独）　昭和57年1月　福岡言語学研究会
5. "Problems on GSGP"（単独）　昭和58年4月　福岡言語学研究会
6. "The Relation between Number Neutralization and Focus Constituent"（単独）　昭和59年8月　ICU夏季言語学研究会　第23回大会（ICU）
7. "Remarks on Contraction"（単独）　昭和60年3月　福岡言語学研究会
8. 「助動詞に関する一考察」（単独）　昭和60年6月　甲南英文学会　第1回大会（甲南大学）
9. "Progressive and Imperative"（単独）　昭和60年9月　福岡言語学研究会
10. 「助動詞縮約と表層構造制約」（単独）　昭和60年10月　日本英文学会九州支部　第38回大会（福岡教育大学）
11. "The Syntax and Interpretation of A-bar Adjunctions"（単独）　昭和61年7月　福岡言語学研究会
12. "The Relation between Number Agreement and Auxiliary Reduction"（単独）　昭和61年8月　ICU夏季言語学研究会　第25回大会（ICU）
13. 「日本語（無- 不- 非-）と英語（in- un- non-）の否定辞比較」（単独）　昭和62年3月　福岡大学総合研究所（福岡大学）
14. "Bracketing Paradox"（単独）　昭和62年9月　福岡大学総合研究所（福岡大学）
15. "Overgenerating Morphology"（単独）　昭和63年3月　福岡言語学研究会
16. 「語彙レベルにおけるθ基準の原則」（単独）　昭和63年11月　日本英語学会　第6

回全国大会（青山学院大学）

17. “Bracketing Paradox and Compound”（単独） 平成元年4月 福岡言語学研究会
18. “Adjective Category Condition in Word Formation”（単独） 平成3年8月 東京言語学研究会 第5回大会（大妻女子大学）
19. “General Condition in Word Formation”（単独） 平成3年12月 関西英語学研究会
20. 「-ly派生語の成立条件について」（単独） 平成8年4月 関西英語学研究会
21. 「-lyと-nessの派生における平行性」（単独） 平成8年8月 Morphology and Lexicon Forum 第2回大会（津田ホール）
22. 「-orの派生について」（単独） 平成9年6月 甲南英文学会 第13回大会（甲南大学）
23. 「-isticの派生について」（単独） 平成13年12月 関西英語学研究会
24. 「「的」論考」（単独） 平成17年5月 Morphology and Lexicon Forum 第11回大会（関西学院大学ハブスクエア大阪）
25. 「語形成論「的」接尾語」（単独） 平成17年10月 JACET関西支部学習英文法研究会
26. “Suffix Combinations and their Constraints in English Word Formation”（単独） 平成18年7月 甲南英文学会 第22回大会（甲南大学）
27. 「接辞付加の制約について」（単独） 平成18年9月 関西レキシコン・プロジェクト
28. 「直接目的語と斜格目的語との意味の違い」（単独） 平成20年3月 関西レキシコン・プロジェクト
29. 「直接目的語と斜格目的語との意味の違い」（単独） 平成21年3月 関西レキシコン・プロジェクト
30. 「動詞連用形の名詞化とサ変動詞「する」の関係」（単独） 平成23年3月 関西レキシコン・プロジェクト
31. 「語の語彙化と一語化の違い」（単独） 平成24年6月 甲南英文学会 第28回大会（甲南大学）
32. 「接尾辞「～中」について」（単独） 平成25年5月 関西レキシコン・プロジェクト
33. 「「～中」の意味と連濁の関係について」（単独） 平成25年9月22日 日本認知言語学会 第14回全国大会（京都外国語大学）
34. 「「～っぽい」の考察」（単独） 平成26年9月28日 関西レキシコン・プロジェクト

講演・出張講義

「英文法の楽しみ方」平成3年5月　京都女子大学公開講座（京都女子大学）

「学校教育の英文法を考える」平成4年5月　大阪市立高等学校教育研究会（西商業高等学校）

「英語の構造と意味」平成8年11月　京都女子大学公開講座（京都女子大学）

「大学が求める英語力」平成9年7月　大阪市立高等学校教育研究会（西高等学校）

「日本語と英語のずれ」平成13年6月　京都女子大学（宗教部）

「単語の形成」平成17年7月　出張講義（三重県立上野高等学校）（沖縄県立普天間高等学校）

「語彙の仕組み」平成17年11月　京都女子大学公開講座（京都女子大学）

「英語の意味と構造」平成19年7月、9月　出張講義（三重県立上野高等学校）（滋賀県立長浜北高等学校）

「英語の勉強の仕方」平成24年11月　出張講義（奈良県立桜井高等学校）

「分かる英文法から使える英文法へ」平成25年7月　出張講義（大阪市立西高等学校）

「英語学を学ぼう」平成30年10月　京都女子大学公開講座（京都女子大学）

「英語学を学ぼう：英語学習に役立つ概念と派生語の仕組みについて」平成30年12月　関西英語教育学会（龍谷大学大阪梅田キャンパス）

その他

［シンポジウム］

「英語教育における文法指導の取り組みについて：中学校、高等学校の実情」平成29年11月11日実施（京都女子大学）平成30年3月　*ESSAYS & STUDIES* N0.63

［教材］

『アクティブ英語演習（Active English Exercises）』（共著）　昭和58年8月　山口書店

京都女子大学英文学会会則

平成24年11月改正

第1章　総則

一、本会は京都女子大学英文学会と称する。

二、本会は京都女子大学英文教室（京都市東山区今熊野北日吉町35番地）に置く。

三、本会は会員相互の英語圏の言語・文化・文学に関する研究、およびこれらとの比較研究とその交流を促進し、学界に寄与することを目的とする。

第2章　事業

一、本会はその目的達成のため以下の事業を行う。

1. 学術誌『英文学論叢』、および*Essays & Studies* 等の刊行。
2. 講演会、研究発表会等の開催。
3. 年次総会の開催。

第3章　会員

一、本会は以下の会員をもって構成する。

1. 大学院英文学専攻、文学部英文学科の学生。
2. 上記1の各専攻、学科等の修了生・卒業生（以下卒業生という）。
3. 英文教室専任教員（以下教員という）。
4. 英文教室旧専任教員、その他運営委員1名の推薦を受け、本会が認めた者。

二、会員は本学会の年次総会、講演会、研究発表会等に出席し、本学会の出版物に寄稿し、出版物（会員名簿を含む）の配布を受けることができる。

第4章　役員

一、本会に以下の役員を置く。

1. 会長　英文教室専任教員の互選により選出されたもの一名。
2. 運営委員　教員若干名、卒業生若干名、在学生若干名。
3. 編集・審査委員　教員若干名。
4. 会計　運営委員のうち1名がこれを兼務する。
5. 会計監査　卒業生1名、教員1名。

二、役員の任務

1. 会長は本会を統轄する。
2. 運営委員は会長を補佐し、本会の運営に当たる。
3. 運営委員は次の諸業務に当たる。
   イ．年次総会、講演会、研究発表会等の開催とその広報・連絡。
   ロ．会計。（会費の徴収を含む。）
   ハ．学会員名簿の作成。
   ニ．その他。
4. 編集・審査委員は次の諸業務に当たる。
   イ．『英文学論叢』の原稿審査・編集刊行。
   ロ．*Essays & Studies*の原稿審査・編集刊行。

三、役員の任期は一年とする。但し、重任は妨げない。

第5章　経費

一、本会の経費は会員から徴収する会費をもって充てる。但し、『英文学論叢』出版の経費については別途の学内資金による。

二、会費　年会費とし、年度はじめに徴収する。但し学部在学生の会員については入学時に在学年限分を一括徴収する。

イ．学部在学生	500円
ロ．大学院在学生	1,000円
ハ．卒業生	1,000円
ニ．大学院修了者	1,000円
ホ．現職教員	3,000円
ヘ．退職教員	1,000円

『英文学論叢』執筆（投稿）規程

2002年11月3日改正

1. 投稿者は本会の会員であること。但し、特別依頼原稿に限り例外とする。
2. 内容は英語圏の言語・文化・文学に関する研究、および比較文化・比較文学に関する未発表の日本語または英語の論文および書評とする。書評は編集委員会の依頼による。（ただし口頭で発表したものはその旨を明記すれば可。）
3. 日本語原稿要領
   1) 横書きで12,000字（30字×40行×A4判用紙10枚）程度とする。機械印字したものを3部（コピー可）と、データファイル（テキストファイルに変換したものが望ましい）を保存したフロッピーディスク1枚を提出する。
   2) 外国語の固有名詞は原則としてカタカナ表記とし、初出時に原綴を括弧に入れて添える。
   3) 引用文は原則として原語とし、訳は添えない。また翻訳を使用する場合は翻訳者、出典を明示する。
   4) 注は原稿の末尾に付して提出し、脚注として印刷する。注番号は裸数字で1, 2, 3, と表記する。
   5) 引用文献一覧を必ず付す。引用、後注、引用文献一覧、その他については、J. ジバルデ/ W.S. アクタート編、原田敬一監修、樋口昌幸訳編『MLA新英語論文の手引』第6版、北星堂、2005年刊に準拠する。
4. 英語原稿要領 ("Notes for Contributors"を参照のこと)
   1) 7000語（A4用紙に約14語×25行×20枚）以内とする。機械印字したもの3部（コピー可）とテキストファイルを保存したフロッピーディスク1枚を提出する。

2) 注は原稿の末尾に付して提出し、脚注として印刷する。注番号は裸数字で1, 2, 3, と表記する。

3) 引用文献一覧 (Works Cited) を付す。論文の体裁、引用、後注、引用文献一覧、その他については、Joseph Gibaldi, *MLA Handbook for Writers of Research Papers* (New York: The Modern Language Association of America) 最新版に従うものとする。

5. 執筆者による校正は再校までとし、誤植の訂正程度にとどめること。

6. 執筆者には抜き刷り20部が無料配布されるものとする。原稿には投稿者の氏名を記載せず、別紙に氏名、論文のタイトルおよび略歴を記載したものを一部のみ原稿に添付すること。

7. 原稿の採否は編集委員会の審査により決定する。

8. 宛名：京都女子大学英文学会　編集委員会

（住所 〒605-8501 京都市東山区今熊野北日吉町35番地　京都女子大学英文学科内）封筒に『英文学論叢』原稿と朱書すること。

9. 締切：第63号の締切は2019年10月9日。

10. 本誌に掲載された論文等については著作権の複製権・公衆送信権を京都女子大学英文学会及び京都女子大学に許諾するものとする。但し、著作権の移動はなく、著者は両者、或はいずれか一方への許諾をいつでも取り消すことができる。

本誌に掲載された著作物の全文又は一部を電子化し、京都女子大学学術情報リポジトリーサーバ或はその他のコンピューターネットワークで公開することがある。

附則

本投稿規程は平成26年12月3日より一部改正施行する。

Notes for Contributors

1. Contributors must be members of the English Literary Society of Kyoto Women's University except in the case of contributors by special invitation.
2. Articles are restricted to unpublished work on the language, culture, or literature of English-speaking nations and/or its comparative aspect over the Japanese language, culture, or literature. Book reviews may be commissioned by the editorial board.
3. The length should not be more than 7,000 words, or 20 pages (25 lines of 14 words). Three A4-size hard copies of the manuscript should be submitted along with a copy on floppy disk. The contributor's name should not appear on the manuscript. Instead, a cover sheet with the author's name, the title of the article, and a brief curriculum vitae printed on it should be enclosed with the copies of the manuscript.
4. As for the style of documentation, contributors are urged to prepare manuscripts in accordance with the directives (parenthetical references and a list of works cited inclusive) of the latest edition of the *MLA Handbook for Writers of Research Papers*.
5. Contributors are allowed two opportunities for proof-reading, the first and the second proofs. But they are urged to limit their corrections to typographical errors, without changing or adding to what they have originally submitted.
6. The Editorial Board, which includes a couple of guest referees, will make the final decision for publication.
7. Each contributor will receive 20 free offprints.
8. Submissions addressed to the Editorial Board of the English Literary Society of Kyoto Women's University should be sent to Department of

English, Kyoto Women's University, 35 Kitahiyoshicho, Imakumano, Higashiyamaku, Kyoto, 605-8501. The envelope should state in red that it contains a submission for the *English Literature Review*.

9. The deadline for submission for No.63 is October 9, 2019.
10. Papers submitted to this journal may be electronically transmitted in other formats. Permission to reproduce any published material must be obtained in advance from the English Literary Society of Kyoto Women's University and Kyoto Women's University. Because the author retains the copyright, he or she may cancel these arrangements with the English Literary Society of Kyoto Women's University and Kyoto Women's University.

    Kyoto Women's University reserves the right in certain instances to make this material (in whole or in part) available to Kyoto Women's University's electronic archives or other affiliated information repositories.

This additional clause (No. 10) shall come into force on the 3rd of December, 2014.

編 集 後 記

『英文学論叢』第62号を、下村伸子先生と高橋勝忠先生のご退任記念号としてお届けいたします。

下村先生は、本学英文学科から大学院修士課程英文学専攻を修了され、1989年4月に専任講師として本学に着任されました。その後助教授、准教授、教授として長きにわたり英文学科の学生・大学院生の教育に尽くしてくださいました。学科のカリキュラム改編には常に携わられ、留学プログラムのチーフや学科主任、英文学会会長などの要職も引き受けられました。ご研究分野はアメリカ文学ですが、エミリ・ディキンスンの詩を中心に19世紀から現代にかけての女性詩人の詩やディキンスンの詩作品のアダプテーションまで幅広く研究対象とされています。

高橋先生は、立命館大学文学部文学科英米文学をご卒業後、甲南大学大学院人文科学研究科英文学専攻修士課程、博士課程に進まれました。福岡大学助教授を経て、1991年4月に助教授として本学に着任後、教授、文学研究科指導教授として英文学科の学生・大学院生の長きにわたる教育に尽くしてくださいました。学内や学科では学生部委員、FD（推進）委員、研究助成委員、学科主任、英文学会会長、文学研究科委員長などの要職を引き受けられました。ご研究分野は英語学ですが、統語論・形態論・意味論の中で、特に生成文法、派生形態論、認知意味論を研究対象とされています。

下村先生と高橋先生の今後のご健康とますますのご発展をお祈り申し上げます。

(M.K.)

［編集委員　甲斐雅之、木村マリアン、日高真帆］

［題字　石田憲次先生］

英文学論叢　ISSN 0286-1674

平成三十年十二月二十五日　印刷
平成三十年十二月二十五日　発行

英文学論叢　第六十二号

非売品

編集兼発行者　京都女子大学英文学会

京都市東山区今熊野北日吉町三五
発行所　京都女子大学英文学会

印刷者　吉川宣治
京都市南区吉祥院這登中町四五―一
印刷所　㈱吉川印刷工業所

ENGLISH LITERATURE REVIEW

No.62

Contents

Articles

"Bolts of Melody":
The Poems of Emily Dickinson and Other Artists
..... **Nobuko Shimomura** (1)

Between Allegory and History:
Reading William Faulkner's *A Fable*
..... **Satoshi Kanazawa** (28)

Fanny Marlow's Stories:
Another "Tom and Viv"
..... **Keiko Saeki** (38)

"The Banality of Evil" in *Never Let Me Go*
..... **Sonoko Matsumiya** (66)

"O, never shall sun that morrow see!":
the sun vs. coal morality play in *Macbeth*
..... **Marianne Kimura** (85)

Lexical non-correspondence in Japanese
and English: Adjectives
..... **John Campbell-Larsen** (102)

THE ENGLISH LITERARY SOCIETY
KYOTO WOMEN'S UNIVERSITY

2018